

# 大村善永研究ノート

## その生涯と事績

室田 保夫

はじめに

二世紀半以上にわたる徳川幕藩体制が崩壊し、明治維新のもと新しい国家体制が形成され、西洋をモデルにしながら近代国家が形成されていくことになる。それは長い鎖国政策から開国に踏み切った時代変革、西洋諸国への文化的衝撃の反映でもあった。西洋という文明国家への憧憬と共に近代国家形成が富国強兵、殖産興業、さらに「学制」に代表されるように教育がその経緯とされていった。その理念「邑ニ不学ノ戸ナク」といった教育政策という国是の遂行は、一方で近代社会、とりわけ教育から疎外された人々も生み出していった。その一例が貧しさ故に、あるいは障害があるが故に学校に行けない子どもたちの存在である。

ここで障害の中でも視覚障害の問題に眼を向けてみよう。近世において盲人の生活安定に一定の役割を果たしていた「当道座」の制度は維新とともに、一八七一（明治四）年に廃止されることになる。明治維新を起点にした近代化は盲人たちにとって過酷なものとなっていった。そうし

たことを背景に明治初期においては英国留学の経験ある山尾庸三による建白書が提出された。また、京都においては古川太四郎の京都盲啞院の設立、東京では古川正雄や中村正直らによって樂善会訓盲院が設立された。そして明治から大正期にかけて各地に盲学校が出来ることになる。しかし視覚障害児者たちはともすれば盲学校を修了したあと、高等教育から疎外されてきたし、近代的な職業を得るにも容易ではなかった。

そうした中、一八八九年の創立になる関西学院は大正初期から視覚に障害がある学生を受け入れてきた歴史があることは注目すべきことである。具体的には熊谷鉄太郎や岩橋武夫らの人物を高等教育の場に受け入れた。<sup>1)</sup>もちろんここにはそれに関与した好本督の存在も忘れることが出来ない。熊谷は関学の神学部で学んだあと、盲人伝道に挺身するが、その一環として当時大阪市立盲啞学校で学んでいた岩橋武夫との邂逅があり、大正中期に岩橋も関西学院で英文学を学ぶことになる。そして岩橋は昭和初期から関西学院で教えながら多くの視覚に障害のある学生と接触することになり、大村善永、本間一夫、高尾正徳、下村仁、瀬尾真澄ら多くの人材を世に送り出すことになる。<sup>2)</sup>しかし彼等については未だ不明の点が多く、岩橋武夫や本間一夫以外殆ど研究の対象ともなっていない。しかしそれは関西学院史の一コマのみならず、社会福祉、とりわけ障害児者福祉の歴史、そしてキリスト教史の課題でもあるのだ。換言すれば関西学院が日本の近代に於いて果たした重要な役割の歴史をみておかなければならない課題であるにもかかわらず、これまでかかる人物について十分に調査、研究がなされてこなかった。

この小論は関西学院で学んだ大村善永という人物に焦点をあてて、彼の生涯と事業を素描していく。ところで、大村については阿佐博の「先達に学び業績を知る 満州の盲人福祉に献身した

大村善永」という簡単な伝記がある程度でこれまでほとんどいいほど研究がなされてきていないのが現状である。<sup>③</sup>ただ彼には八四歳の時、記した『三死一生』<sup>④</sup>という自伝がある。ここではそれを一つの手掛かりとし、彼の生涯と事業を概観し、大村善永研究の一里塚としておきたい。大村は一九四〇年、「満洲」<sup>⑤</sup>の奉天（現瀋陽市）にわたり、該地での盲人たちの福祉事業を展開していくことになる。福祉の歴史からみればそれが重要な業績であり、また戦後はシロアム教会を中心にしたキリスト教の伝道活動、あるいは盲人伝道と彼の活動の範囲は広い。もちろん社会事業という視点からは満洲の社会事業史、あるいは植民地の社会事業史の重要な課題ではあるが、ただその詳細については今後の研究課題とし、したがってこの小論は大村についての大凡の生涯と業績を明らかにしていくことを第一義の目的とするものである。

## 第一章 誕生、満洲、岡山、そして朝鮮へ

### (一) 誕生

さしあたり大村の関西学院入学までを瞥見しておこう。大村の誕生から少年時代については彼の自伝『三死一生』に頼らざるを得ない。大村善永は日露戦争が勃発する寸前の一九〇四（明治三七）年一月七日、山梨県東山梨郡八幡村北（現山梨市北部）で誕生した。父房太郎、母るいの六番目の子どもであり、大村家は農業と養蚕を生業としていた。大村家は維新前、苗字帯刀をゆるされた家柄であり、比較的裕福な家庭環境であったと推察される。ところで彼の生涯において、大きな思想的影響を受けたのがキリスト教であるが、この点を少しふれておきたい。

そもそも維新後、山梨県にキリスト教が入ったのは明治一〇年代である。カトリックは一八七八年から伝道を開始している。大村家と関係の深いプロテスタントは七七年からカナダメソジストのC・S・イビーと平岩愼保が伝道を開始したことによる。明治二〇年代もメソジストが甲府を中心に伝道を行っており、旧家である大村家はこのメソジスト教会の伝道において恰好の対象になったと考えられる。<sup>(6)</sup>その結果、祖父やその兄弟、そして父とその子供たちの多くがクリスチャンとなつていった。こうした環境を看過することが出来ない。

大村家のことでもう一つ言及しておかなければならないことは、祖父の長男たる房太郎に対する偏愛であつた。このために、二男壬作、三男章作、四男貞平の三人が申し合せて家出をしている。ちなみに四男貞平は通信官吏となり、通信監理局勤めとなり後に満洲に出て、善永の養父になるのである。

ところで、大村の自伝のタイトルは『三死一生』であるが人生において三回、死に目にあつたとしている。その第一回目が二歳の時であるという。それは村社の秋祭りの時、肥溜に落ち、危うく命を落としそうになつた経験である。これが自伝の『三死』の中の最初の「死」の体験であつた。もちろん幼年期のことであり、彼の記憶に定かにあるとは思えない。

## (二) 養子―満洲へ

『三死一生』によれば、幼年時代に大村の「生涯を一変する出来事」が起る。三歳の夏に「満洲のおじちゃん」、すなわち「子供のない叔父夫婦」の家に養子に出されていくことになる。叔父とは既述した四男の大村貞平である。離別の当日を「母のなげきもかいたく遂に運命の日は来

た。紺がすりの着物に、甲斐絹のへこ帯を胸高にしめて、叔父に手をひかれ、屋敷の定口をいそいそと下りてゆくわが子の後姿を見送る母、姉、兄たちその上、親しい近所の人々まで誰ひとり別れを惜しみ、涙にぐれない者はなかったという<sup>(7)</sup>と思いい出を記している。叔父夫婦との生活は満鉄線の熊岳城駅近くにある通信監理局の官舎であった。そこで近所の労働者、工夫のおかみさん、宋という中国人工夫の親切さ、「こういう素朴な人たちの中に、私は幼ないながらも実母の愛を代行する無垢な善意を感じながら育つて来たように思う<sup>(8)</sup>」と述懐している。熊岳城は大連から北に二〇〇キロ近くに位置しており、近くに温泉のある風光明媚な場所で、眼を患う前の大村には明確に当時の風景が脳裏に刻まれていたことと思われる。まさに原風景というものであった。

さて熊岳城での生活の後、養父の引越すのために大連に移ることになる。大村は「大連はロシアの占領下にあった時代に設計された町で、立派な港があり、街路は真すぐに走って、両側にはブロックを敷きつめた歩道が設けられきれいな店や、会社が並んでいた。街路樹はよく手入れ、四、五月にはアカシアの花がよい香りをただよわせた。一番立派なのは、中央の大広場だった<sup>(9)</sup>」と当時の様子を回顧する。当初、この大広場の近くにあった小学校から、三年生の時、西公園の中に新築された第三小学校に転校している。

その後、また養父の転勤で旅順（現大連）に引越す。旅順は二〇三高地をはじめ、日露戦争時の激戦地であった。大村は満洲で唯一の官立中学であった旅順中学に入学することになる。ここにおいても養父が長春に移ることになり、彼は中学校の寄宿舎にて学生生活を送る。寄宿舎では高等学校を目指して日夜、学問に励んだことと思われる。かくて、一九二一（大正一〇）年四月、一七歳のとき、彼は岡山の第六高等学校に入学することになるのである。

### (三) 第六高等学校入学と退学

当時、高等学校は向学心のある若者の憧れの教育機関であり、大村も岡山での学生生活を送る。もちろん高等学校に進学できる学生は限られていたし、幸福な家庭環境であったことは推察される。大村が選んだのは岡山にある第六高等学校であった。六校は一九〇〇（明治三三）年三月に岡山市に設立された官立の旧制高等学校であり、名門であった。大村は「校庭をへだてて寮があった。その東側に松のみどりの濃い操山を背負い、南側に広い芝生をへだてて山陽女学校の建物が望見された。学校の寮は南から南寮、中寮、北寮と二階建ての建物が平行し、その間に高い松の木がそびえ、その根本に沈丁花が花盛りだった。私は北寮二階の四号室に入れられた。定員は八名で内二名は二年生だった。出身地や性格がそれぞれ違っている、若人らしいおらかさが全体の雰囲気（<sup>10</sup>）をなごやかにしてくれた」と回顧している。大村はこの憧れの六校入学を果し、学生生活を満喫し、未来に夢を託し希望に胸を膨らませていたことは想像に難くない。

しかし、一年生の暮れに眼の病気の兆候があらわれ、岡山医大病院の眼科で診察を受け、その結果、急性網膜炎という診断を受け一年間の休学を言われたが、無理して期末試験を受け二年生への進級を見届けて、急遽満洲へ帰ることになる。ここでロシア町の満鉄病院に行き診察を受けた時、出血を見たのである。そして「網膜硝子体出血」という難病のため、入院を余儀なくされた。その入院も重症の診断で一人部屋に移されている。その時の心情を彼は後になってであるが、「一人病床に身を横たえていると、きのうまでこの世の春を一身に、若さを謳歌した高校学生、今はうらぶれて、いつ失明するとも知れない悲運に泣き、不安の黒雲はもくもくと心の中を這いずりまわっている。つい先日まで胸ふくらませ希望にあふれていた前途が今やすっかり暗に閉ざ

される思いだった」<sup>(1)</sup>と苦渋な心境を吐露している。こうした希望から失望への転落という体験は、後に関西学院で恩師となる岩橋武夫が早稲田入学後、一年で網膜剥離となり、失明し帰阪した体験と重なる。こうして大村も僅か一年において高等学校生活を断念せざるを得なかった。ただ当時、彼は完全失明という症状ではなかった。

#### (四) 朝鮮での農業経営

一九二三年七月、大村は大連から豪華客船サイペリヤ丸にて帰郷する。一九歳の大村はおおよそ一六年ぶりに故郷の地を踏んだ。ちなみに二ヶ月後の九月一日、関東大震災が勃発する。翌二四年六月、二〇歳になった大村は甲府にて徴兵検査を受ける。結果は視力が問題となり「丁種不合格」となった。そして大連に帰り、養父母の援助もあり、朝鮮全羅北道にて農業経営をすることになる。朝鮮での農業経営には矢崎清七・そのえ夫妻の支援を受けている。そのえは実姉である。「そのうち、村落内では相当顔のきく義兄のきも入りで、二〇坪ほどの家屋敷と三町歩あまりの田地を手に入れることが出来た。水田作りには、まるつきり素人の私はしばらく義兄の家に住み込んで朝鮮での農業の実地を習得することになった」<sup>(2)</sup>とある。このように農業の方は成功を収めたが、再びマラリヤという病魔が大村を襲うことになる。この罹患が因でわずかに残されていた視力も完全に失なわれ、奈落の底に突き落とされたのである。失明当時を大村は次のように回顧している。

思えば十七歳の春、若人たちのあこがれの的、旧制高等学校に入学をゆるされ、若人の夢をまんきつしていたその幸せの絶頂に、思いもかけず目を患い、その頃としては最新の治療

に打ちこんだにもかかわらず、学問への進路は完全にとざされてしまった。医師のすすめと、養父母のゆるしを得て、十六年振りに郷里に帰り、農業への希望を見出して朝鮮にまで来たのだった。ところが今は小さな田園王国の夢さえ奪い去られ、何を目あてに生きたらよいのか全く希望を見失ってしまったのだ。<sup>(13)</sup>

ちなみに、兄の勇は大連の勤務を辞めて、青山学院の神学部<sup>(14)</sup>に復学し卒業後は教会活動に挺身していた。そして兄から点字聖書を送られることになる。点字にて聖書を読み、信仰を深めるにあたって、神やイエスへの疑問が生じ、大村はある日自殺を決行しようとしたが果たせなかった。むしろこのこと<sup>(15)</sup>によって信仰に生きることの決断がなされた。本間は当時を「ほんとうの愛に目ざめた私の魂はこの時に初めて、絶望から希望へ、死から生へ、滅びから救いへと呼び返されたのである」と回顧している。

人生に前向きに歩み始めたその頃、大阪から『点字毎日』を取り寄せ、それを購読しており、点字を習得することによってヘレン・ケラー、アン・サリバンの存在、そして岩橋武夫のこと等々を知るようになる。こうした情報を得ることによって大村は再び学問への情熱が再燃し、大阪行きを覚悟する。そして養父に向学の志を打明けて承諾を得、希望する内地行きが実現することになる。かくて大阪に赴き、大阪毎日新聞社にて中村京太郎、大野加久治、長岡加藤治らと面会し、日本の盲界事情や盲人として生きる心がまえ等を聞き、自らの手でもって新しい人生を切り拓いていくことになったのである。

## 第二章 関西学院時代

### (一) 関西学院入学

大村が関西学院に入学する前の状況については次のような回顧がある。市立盲学校寄宿舎にて一週間宿泊し、盲教育の実地研修を受けた。その後、岩橋武夫の近所に下宿し関西学院入学の準備をしたとあり、岩橋の妹の静子が週二回英文タイプライターの練習をみたりしている。そして一九二九（昭和四）年四月、岩橋の秘書に付き添われて文学部長ウッズウォース（Woodsworth）に面接したが、その結果、一年間は聴講生として勉強し、成績次第で本科生ということに落着いた。ともあれ、こうして大村の関西学院入学が実現した。

入学式は、学長ベーツ（C.J.I. Bates）の英語による式辞があった。学院は原田の森の学舎から新しくこの上ヶ原に移転した。それは大学四〇周年を記念しての、そして大学設置という大きな目標が背景にあった。当時、ベーツは新しい出発にあたって次のように語っている。

わが学院は四部から成立し、中学部、高等商業学部、文学部、神学部に分かれてゐる、学院の教育方針は宗教と教育の調和を骨子として進んでゐる、宗教を抜きにした教育はあまりにも物質的で精神的要素をや、もすると見失ははれることがある、夫故に教育による宗教、宗教による教育といふ理想に立つて宗教が迷信にならず、教育が物質的にならぬやうにこの二者の調和を求めてゐる、そして全人主義の人格建設に重きを置き、飽までも学生の自由を尊重してゐる、我学院のモットーはマスター・フォア・サービス、青年よ汝は主となれ、強くあれ、而してそれは人に奉仕するがために自主の人となれ、真理は將に汝を自由にならし

める、真理を土台とした自由である、斯くして人に奉仕するその精神こそ武士道の精神であり中世紀のナイトの精神である、かかる幻と信仰をもてる教養ある青年を養成し、又教師と学生は親子兄弟の親密さと和氣藹々たるうちに教育をつゞけてゐる、こゝに関西学院の学院たる使命がある、故に我が学院は教育と同時に尚ほ一つの使命ある学校であることを識つてもらひたい。<sup>(15)</sup>

こうした一貫とした使命をもつた学院の方針を聞きながら、キリスト者でもある大村の心は喜びに溢れていたことは想像に難くない。そして「翌日の始業日は朝、猛烈な雨だった。神戸の前校舎から、この春越したばかりのスパニッシュスタイルの新校舎は、元、田んぼだっただけに通路は泥沼同然である。私が寮の玄関を出しぶっていると、宇都宮というクラスメイトがおぶつて上げよう」と大きな背中に私をひよいとのせて向うがわに無事着陸というひとこまもあった<sup>(16)</sup>と学友との仄々とした想い出を語っている。また「英文科一学年は六十人という若人を集めていた。その大教室はぬり立ての壁の匂いや、したみの塗料が鼻をついたが、すべてが新鮮で好感が持てた。寮では毎朝食事前に集會室に集つて寮生の祈禱会が開かれた。全員というわけにはゆかなかつたが、私は支障のないかぎりに毎朝出席した<sup>(17)</sup>」ともある。視覚に障害をもっていたとはいえ、多くの人々に支えられながら学院生活を送っていたのである。

また同じ英文科で和歌山出身の島史也という同級生とは親しく交わっている。島は大村と同様に寮に入り、生活面においても支援を惜しまなかつた。島の主唱で週に一回一室に集つて、準備した論説、エッセー、詩などを発表し合い、そこでは文学論が自由、活発にたたかわされたりしている。このように大村は「水を得た魚」の如く学院生活を満喫したのである。そして大村の学

院時代に関西学院は念願の大学昇格が実現する。一九三二（昭和七）年三月七日に大学令による関西学院大学が設立が認可され、学院全体として喜びで高揚していた。

（二）卒業をめぐつて

大村は大学四年生の時、関西学院新聞から原稿を依頼され、「闇に生活する」というタイトルの文章を書いている。その内容は最初に入学式での嬉し涙にふれ、関学入学に至る自分の履歴を記し、「恰も砂漠を旅する旅人が砂塵に吹きまぐられ暑さと戦ふ幾十日かの旅路からやつと緑のオアシスに辿りついたやうに魂の曠野をあてどなくさまようて来たこの青年は今や、曾て味つた智恵の実を再び取り生命の泉を掬し、物象の世界は失はれても聴覚と触覚を通じて心霊の糧を豊かに享受する身となつたのでありますからその喜びは如何ばかりだつたでせう」と感慨を語る。そして以下のように関学の前途を期待する。

普通ならば闇の中に捨てられて顧みられなかつたかも知れない彼が普通人と肩を並べてひとしく光明の前途へと精進の一路へと辿り得ることはたゞに彼一個にとつて驚くべき恩典たるに止まらず又運命開拓の象徴として他を刺激する大なるものあるを信じます。諸外国では各大学に於て盲人にもその門戸を開放し盲人の社会的活動も可成りみるべきものがあります。翻つて我国を見ますに盲人と云へば鍼、灸、按摩か琴の師匠などより他には殆ど為すべきことがなく高等の学府は視力に欠陥あるもの、入学を許さず向上の道を絶たれた若き盲人達は徒らに卑屈するの外ない現状であります。然るに當学院は多年弱者の友たるキリストの精神に沿ひ、女子や盲人をもその資格あるものにはこれを入学せしめつゝある

ことは校風の一大誇りであると思ひます。今や大学昇格を実現し洋々たる前途に向つて一歩を踏み出した関西学院がその表面的発展と共に内面的にも益々その使命を發揮すべきことを信じて疑ひません。

この文章が「大学昇格祝賀号」に収載されて刊行されたのは、四年生の卒業間近の年末のことであつた。いわば文章全体が彼の四年間の総括のようなものである。

ところで大村は四年生になり卒業論文という難題におつかる。これにはロマン派の詩人ジョン・キーツを選び、その中の「Ode (オード)」に焦点を絞つて執筆した。しかし卒論とはいへ、自由に研究をしようと思えば彼一人では心許ないことはいうまでもない。そこで卒論研究に力を貸したのが平間輝男という学生であつた。ボランティアとして買って出た平間は千葉県銚子出身の後輩である。大村にとってそれは「干天に慈雨」の心境であつた。平間について次のように述懐している。

それからというものは毎日のように学院の図書館から参考資料を借りてくる。本屋に行つては何か買つてくる。それらを私の本棚において片端しから読む、それでも足りないといばかり、私を散歩に連れ出しては、林の中の切り株や、橋のらんかんに腰かけさせては読む。極端なのは、私を床やつれていって、刈つてもらつてゐる間、そばに腰かけて読むといふ具合。私が頼んだ個所にはアンダーラインして寮に帰つてから点字に写させてくれるのであつた。<sup>19)</sup>

このような一人の学生の献身が文学部長夫人のミセス・ウッズウォースの耳にも入り、彼女も手伝うようになった。ちなみにこの平間という学生の妹が後に大村の妻となる平間きみである。

卒論のタイトルは「A Study on Keats's Odes」で、英文タイプ二一枚のものである。<sup>20)</sup>周知のようにタイトル中の Ode とは特殊の主題でしばしば特定の人や物に寄せる抒情詩である。ジョン・キーツ (John Keats, 1795-1821) は一八世紀末にロンドンで生まれたロマン派詩人である。バイロン (George Gordon Byron) からも親交があったが、両親と死別し、大学教育を受けていない。一八一七年に最初の詩集を発表したが、その四年後二一年、二五歳で結核のために夭逝した。一九年に“Ode to a Nightingale”や“To Autumn”など六編のオードやバラッド、物語詩など多くの傑作を書いた。大村がキーツを選んだ理由は、二五歳という若さで無念の死を遂げた人物への共感とそのオードの持つ魅力的な世界であったのではないか。

ともあれ、大村は一九三三年三月、優秀な成績で学院を卒業した。<sup>21)</sup>大村の関学時代の世相は世界不況、満洲事変、五・一五事件等が勃発した。とりわけ満洲事変は彼の心に気にかかったことであつたと推察される。そしてこうした暗い世相を反映し、就職難の時代にもかかわらず、横浜訓盲院で働く場を得ることが出来たのは幸運なことであつた。

### 第三章 横浜訓盲院教師

#### (一) 教師として

関西学院を卒業した大村は横浜訓盲院の教師となる。院長はギデオ・F・ドレーバー (Gideon F. Draper) であつた。ここで七年間教師をすることになる。そもそもこの施設の淵源は一八八九年九月二六日に設立された「盲人福音会」という民間のものであつた。<sup>22)</sup>施設はキリスト教主義

で運営されており、関学で学んだ先輩の熊谷鉄太郎もかつてここで教えていたこともある。大村は『横浜訓盲院』の中で「わたしは一九二九年中途失明者として、関西学院文学部に入学し、一九三三年、卒業と共に今村先生の御世話で横浜訓盲院に奉職、一九三九年日中戦争の激しいさなか、小さい時から育った大陸の人々への恩返しのためで満洲に渡り、彼地の盲人の福祉と教育に挺すべく院を辞した者であります」と当時を語っている。文中の今村先生とは後の当院理事長にもなった今村幾太を指していると思われる。そして在院時代を次のように回顧している。

今在任中で一番印象深かったことの一つは就任後間もなく、元院長ギデオン・F・ドレーパー博士のお宅をお訪ねした時のことです。山手の丘の中腹に建てられた宣教師館を訪れた日はおだやかな春日和でした。庭先の大きなびわの木の上で小鳥達がわたしを歓迎するかのようにしきりに囀っていました。ドレーパー夫妻を初め、令嬢のウイニフレッド・メリオン両姉妹と歓談の後、外に出るとミス・メリオンが庭先の花壇から小さな花をとって出来立ての背広の衿につけてくださり、「これシネラリア」と云われました。わたしはまだ目が見えた頃好きだったシネラリアの青空のように清らかな花を思い出し、若さの希望に胸をふくらませたものです。……略……訓盲院時代には山本先生初め、先輩同僚の先生がたから多くの御指導、御鞭撻を受けました。経験の浅い若僧の教師は大した働らきも出来ず、皆さんに御迷惑をかけたことを思っ、お恥しい限りです。どうか主の恵みと多くの人々の愛顧に支えられて九十年の歴史を歩んで来た横浜訓盲院がいつまでも主の御栄光に奉仕されますよう、願ってやみません。<sup>(24)</sup>

大村は就職した翌年の三月二四日、関学時代の級友平間輝雄の妹きみとドレーパー院長司式の

もとで結婚式を挙げることになった。「訓盲院の裏門から程近い借家の新家庭は、神の恵のもと平和に明け暮れた。翌三月には長女はるみ、二年おいて長男美国が与えられた。若い親達は失敗を繰り返しながらもこの時代が一番平和で楽しかった」と後年<sup>(25)</sup>になって回顧している。

## (二) 辞職をめぐる

大村の訓盲院時代、一九三七年七月に日中戦争が勃発し、中国大陸はますます戦禍が激しくなっていく。それ以前、関学生の時であるが三一年九月には「満洲事変」が勃発し、翌年二月、国際連盟が派遣したリットン卿 (V. A. G. R. Lytton) を团长とする調査団が派遣された。一方、日本は三月一日に、「満洲国」の建国を宣言し、既成事実でもって調査団に抗した。翌年「満洲国」の不承認を内容とするリットン報告書が総会で採択され、日本は国際連盟を脱退した。こうした世界の流れと日本がとった方向との齟齬の歴史があり、日本は薄儀をたてて傀儡国家満洲国を国策として展開していき、世界との溝を広げていく。こうした国際情勢は満洲を故郷とする大村の気にかかるところであったことは言うまでもない。

ところで一九三七年四月、日本国内においては大村の恩師でもある岩橋武夫の尽力もあり、ヘレン・ケラーが来日し大歓迎がなされた。ケラーは国内各地において講演をして回ったが、満洲をも訪問する<sup>(26)</sup>。しかし日中戦争の勃発とともに帰国することになる。当時の日本と中国との関係の悪化、とりわけ満洲の状況を大村は常に気にかけていた。こうした状況の中で、当時の大村は非戦論者として述懐されている<sup>(27)</sup>。横浜訓盲院の大多数が好戦論者であった。しかし大村と同様二人の教師がそれに疑問を感じていた。河原と真船教諭である。こうした考え方が訓盲院内で軋轢

を生じたようであり、三人は辞職し、真船と大村は共に朝鮮から満洲、中国の北方の方に視察旅行を企てている。その後、「大義名分を欠いた日中戦争のごまかしに何としても納得が出来ず」<sup>(28)</sup>大村は岩橋武夫の紹介でフレンド協会委員長のギルバート・ポールズ博士夫妻を訪ねて、その敷地内の一室で起居し、満洲国に対する建白書を認めたのである。<sup>(29)</sup>それにつきポールズは「大村君は、君が横浜訓育院<sup>(30)</sup>に教鞭を執つて居られた五六年間、私の知人であり、また、過去半歳に亘て、君が基督友会本部に居住された間親しく交つた関係上、私は君の将来の事業に対し深き興味を有するものである。私は君の人格と手腕と、及び君が奉天の盲人延いては全滿の盲人に使命を感じ、此の為に献身せんとしてゐる態度に対し強い敬意を払ふものである」と記している。そして次章でみるように、大村は満洲へ移転することになる。

大村が満洲での盲人事業を決意したのは一九三九年夏のことである。そこには、三七年七月の日中戦争勃発が大きな要因となっていた。幼い時を過ごした満洲は彼にとって故郷でもあった。「学友の幾人かは勇躍征途につき、その或る者は軍刀を揮つて敵陣に突入し、遂に護国の鬼と化した。然るに己は眼盲ひたるが故に余りにも為す無きを嘆ずる思ひが次第に深まつて行つた。同時にめぐらだから敵陣に見える事は出来なくとも、日本盲人の名に於て積年の非政と戦乱に喘ぐ悲惨な大陸の盲人に援助の手をさし伸べたならば、亜細亜民族協和の一助ともなるであらうとの考へが起つて来た」<sup>(31)</sup>と動機を披瀝している。

そして一九三九年夏に職を辞し、同僚の真船とともに大陸の盲人事業を視察したのである。その結果「満洲に盲人の保護並びに教育の施設が必要なる事を痛感した」<sup>(32)</sup>。かくて翌一九四〇年三月六日に「建白書」を満洲国政府、畑総裁に陳情したのである。

## 第四章 「満洲盲人保護並びに教育に関する建白書」をめぐって

大村が提出した建白書は「満洲盲人保護並びに教育に関する建白書」（以下「建白書」と略す）として、満洲に渡る前、一九四〇年七月に刊行された『満洲の盲人に光を』という小著に収載されている。<sup>(33)</sup>この著は兄の大村勇が編集したことになっているが、この著の内容について次章で取り上げたい。さしあたりここではこの著に掲載された「建白書」のみ言及することにする。「建白書」は、一「趣意」、二「盲人福祉事業に就て」、三「盲教育に就て」から構成されていて、大凡四〇〇〇字の長文である。

「趣意」の冒頭で「古今東西の歴史を按ずるに、国家社会文明の尺度は鰥寡孤独不具廢疾等の弱者が保護せられ、救済せらるゝ程度にありと謂ひつ可し。即ち欧米の諸文明国にありては一般文化の進歩に並行して、病院、特種学校、養老院等の施設完備せられ、欧米人が未開の国土を開拓せんとするや先づ医療、教育、救済等の施設を急ぎて、人心を案んずるは幾多の実例に見る所なり」と述べる。そして日本の該事業も明治維新以来少しずつ、發展を遂げてきた。しかし翻つて満洲をみると「満洲国は建国日尚ほ浅きにも拘らず、国家百般の施設頓に進捗し、今や世界驚異の焦点たり。上に仁慈なる 皇帝陛下を戴き、下方民衣食足り、善政の徳化辺境に洽く、国民挙つて新政を謳歌するに至れるは、寔に慶賀に堪へざる所なり。不肖今般満洲に到り、備に国内の事情を察し、嘗て不肖が少年時代を化育を受けたる當時を回想し、転た今昔の感に堪へざるものありたり。唯茲に遺憾としたる一事は特種教育及び社会事業、特に盲人に対する保護並に教育施設の甚だ微々たる事なり」という。日本が中国に侵略していつているという痛みはないが、大

村自身が幼年時を過ごした関係が述べられ、満洲の盲人に対する「保護及び教育」施設は、日本国内に比し著しい不備の状況であるという指摘がある。これは彼の満洲視察に基づいての発言である。保健、医療も不完全であり、加えて彼等の職業もなく「盲人の大多数は徒食者又は乞食なり」と論じ、彼等が非常に不遇な状況に置かれていることを憂慮する。それは彼等に原因があるのではなく、「失明てふ一小欠陥の補はれざる故なり」と指弾する。政治的な意味はさて置き、如何に彼等に対する事業を展開し、現状を少しでも打破して、彼等が幸福に暮らしていけるようにという思いが吐露されている。大村が育った地の同類に対する同情からの発言と捉えられよう。

二の「盲人福祉事業に就て」では、冒頭の「盲人を救護するは先づ衣食よりして教育に及ばざるべからず」という表現に彼の構想が込められている。盲人教育と保護事業との一体化をはかつていくことが大きな目標となる。具体的には「満洲盲人福祉協会」を設置しここを拠点にして、盲人会館と盲学校を設置し事業を展開していくこととする。具体的には盲人会館の事業は、

- (一) 盲人調査……地方別盲人の個別的及び統計的調査を為す。
- (二) 盲人保護……盲人の身の上相談に応じ、又貧困、病弱、老衰の盲人を救護す。
- (三) 医療保護……病院と連絡をとり、失明防止、開眼手術、眼疾治療其他の医療をなす。
- (四) 成人教育……教育適齢を越えたる成盲人に対し、盲人会館又は巡回教室に於いて、若くは個別訪問によりて、点字の読み書き等の教授及び授産を為す。また会館に点字図書館を設けて閲覧に供し、会館の講堂に於て、修養、娯楽、宣伝等を目的とする集會を開く。

(五) 製作所及び出版所……盲人の職工を雇傭して手工業、点字出版等に従事せしむ。

(六) 合作社……盲人のための購買、販売、信用、利用等の利便を図る。

以上のような具体的な盲人施策を構想し、上申したのである。

三の「盲教育に就て」では、近代教育の「智育偏重」を指弾し、「精神教育」と「労作教育」をも重視しなければならないこと、具体的には「労作教育」を「特種学校」において重要視しなければならないことを指摘する。そして「満洲国にありては農業が国家生産の首位を占め、且つ農家出身の盲人が大多数なるべきを以つて、満洲の盲学校に於ては農業教育を第一位に推すを適當」とし、その具体案を示している。また針灸、按摩等の療術を習得せしむるとしている。さらに「凡そ事業の成否は之に当る人物如何に在り」というように、とりわけ特殊事業に至りては、こうした事業を遂行していくための人物が一番肝要であることを指摘する。そして、

斯くして機構と人との完全なる調和を見、国民挙つて此事業を贊助し、資材を投じて博愛慈善の道に精進するに至らば即ち国を挙げて王道樂土たるに邇からん。満洲盲人を思ふ情切なる余り、敢て尊嚴を犯し、涕泣して謹みて献策す。幸に嘉納を得ば、之が実現に關しては不肖も亦第二の故郷満洲の爲めに、犬馬の勞を辞せざるべし。希くは不肖の微衷を酌まれ、不幸なる満洲盲人福祉の爲め一臂の勞を借しまれざらん事を。

と結んでいる。大村の当時の肩書として「東京盲人会館調査委員」と「関東盲人事業連盟幹事」となっている。ちなみに住所は「東京市芝区三田台町一ノ十三番地」とある。こうした満洲での同じ苦しみを持つ人々への支援を彼は訴えたのである。この「建白書」に描かれた構想が後の満洲への移住と事業の核となつて具体的に展開されていく重要なモチーフとなつている。<sup>(34)</sup>

## 第五章 『満洲の盲人に光を』をめぐって

大村の兄、大村勇は一九四〇（昭和一五）年七月に小雑誌『満洲の盲人に光を』を編集し発行している。<sup>35</sup>そして多くの人からメッセージを収集し、この著が刊行された。以下、掲載順に執筆者の肩書、タイトルを原文どおり記しておくことにしよう。

中央盲人福祉協会会長大久保利武「大村善永氏を推薦す」、東京盲人会館常務理事大河原欽吉「大村善永君の計画」、大阪ライトハウス館長岩橋武夫「一粒の麦地に落ちて死なずば―大村善永君を推薦するの辞」、関西学院院长ベーツ博士「満洲盲人の福音」(Work Among Blind People Of Manchuria)、奥島太一郎「推薦の辞」、日本メソジスト奉天教会牧師平野一城「贖罪愛の進路」、基督教友会委員長ギルバート・ボールス「大村君夫妻を推薦す」である。

ここで彼の関学時代の恩師岩橋武夫と学院院长であつたベーツの文章について言及しておくことにしよう。岩橋は日中戦争と第二次大戦の勃発という世界状況を背景に、「アジアに黎明の光をもたらすべく立ち上つた我等一億の国民が世界に振り出した『王道楽土』の大手形が不渡りにならぬ様、一にも二にもこれを行動に於いて実証すべき日が刻々に迫つてゐる」と事業の意味を述べ、「日滿支を結ぶ共同帯として愛盲事業が黎明期に立つ日本に取つて如何に必要欠く可からざるの聖業の一つであるかは以上述べた処に照らすも明らかであらう。何となれば闇に住む百万余の人々に光りもたらされてこそ黎明のアジアたるを得るからである。……略……一人の闘士が身を挺して友邦満洲国同憂の友に対し教育社会事業の分野に於てなすあらんと発願するに至つた事は誠に近頃の快事である」と<sup>36</sup>している。そして『『光は東方より』とするならばその光りが今

日本より満洲に延び様としてゐるのである。私は同じ光りが隣邦支那の天地にも愛盲の烽火として延びん事を待望しつつ、大村君を紹介する言葉としたい<sup>(37)</sup>と結んでいる。

一方、関西学院長ヘーンは「Work Among Blind People Of Manchuria」<sup>(38)</sup>と云ふタイトルのもとで、以下のような文章を残している。

I have heard with great interest of the plan of my good friend and former student Mr. Y. Omura, to go to Manchukuo and there establish a school for blind people in that country. This is a lofty vision and a noble ideal. It calls for the spirit of adventure and sacrifice, which I know that he possesses in a high degree.

When Mr. Omura was a student in Kwansei Gakuin it was always an inspiration for me to talk to him. His courage and spiritual vision lifted him on to a higher level of living, and made possible achievements that were not realized by some other students who were not handicapped as he through loss of sight. His life and work with us testified to the fact that God compensates us for our losses in other and better ways if we but trust in Him and make ourselves available for His Service.

It is an inspiring fact that, as we read in the New Testament, our Lord Jesus Christ always responded to the call of the blind, and with love and deep compassion opened their eyes and restored their sight. Even though we may not always be able to do that we can do much to alleviate their distresses by opening the eyes of their minds and hearts through education and religion, and thereby help them to live enlightened and contented

Lives.

For this great service of love Mr. Omura is well fitted by character, training and experience, and we may look for real success in that work to which he feels Divinely Called.

ベーツはここで大村を「良き友」「教え子」と呼び、彼の満洲での事業を「崇高なる識見」「理想」と称している。また関学時代、学長と一学生の関係であったが、大村と語るとは「インスピレーション」であったと述懐し、かかる事業を遂行していくことに、その人格、才能、経験ともに最適であると支援を送ったのである。ベーツの障害者に対する信頼と一人の人間としての認識が窺えるし、教育の原点のようなものが察知できる。

ともあれこうして大村は、満洲での盲人福祉への構想を抱いて一九四〇年九月二四日、一家を挙げて満洲に移住する。それは、中学まで育ったいわば「故郷」への回帰でもあった。

## 第六章 満洲時代（一）―奉天盲人福祉協会の創立―

### （一）『愛盲之烽火』をめぐる

満洲に渡った大村は奉天にて起居することになる。当初から、大村は山梨に帰郷した時、世話になった平野一城奉天青葉教会牧師に頼ることになる。大村は彼を「精神面のおやじ」と称している。<sup>(39)</sup>大村の来奉には満洲帝国初代の国務総理鄭孝胥と親交のあった大久保利武の推薦があった。<sup>(40)</sup>そして早速、構想の実現に奔走し、一九四一年三月に奉天盲人福祉協会の発会式を挙行する

ことが出来たのである。

ところで大村は一九四一（康德八）年一〇月五日、『愛盲之烽火』<sup>(4)</sup>という著を編集し奉天盲人福祉協会から上梓する。ここでこの著作を紐解いてみることにする。この著には「序言」（奉天市副市長）に続き奉天盲人福祉協会の「趣意書」<sup>(5)</sup>が掲載されている。「趣意書」に引き続き、第一部「論説」と第二部「奉天盲人福祉協会成る」、そして第三部「奉天盲人福祉協会の展望」という構成になっている。

まず趣意書であるが、その冒頭は「我が満洲帝国は建国日尚ほ浅きにも拘らず国運頓に勃興し之に伴つて我が奉天市が国内第一の産業交通の要衝として飛躍的發展を遂げつつある事は誠に慶賀の至りであります。実に都市の興隆は国力の消長を卜するものでありまして都市の充実改善は近代国家の等しく講究する所であります。然して市民中の不具廢疾者等に対する衛生保護教育等の所謂社会事業施設も亦競つて充実に努めてゐる所であります」として、次の様に論じる。

我が満洲国に於きましても今や此種施設の必要性が叫ばれ既に成果の見るべきもの尠くありません。然るに独り盲人の福祉施設に至つては殆ど手がつけられてゐない有様であります。医学上の各種統計によりますと満洲国人の過半数はトラホーム患者であつて内数パーセントは失明して居り、之に傷痕や諸種の疾患による失明者を加へれば恐らく満洲盲人の数は数十万に達するであらうと思はれます。速かに眼の衛生思想の普及と失明の防止を図らなければその将来は実に憂慮すべきものがあります。蓋し人生の不幸失明に勝るものはありません。かかる不幸な盲人を保護教育等の福祉施設によつて精神的経済的に自力更生せしめる事は国家社会連帯の義務であると思ひます。又現に視力の低下と失明者の増加は

国防力の強化と生産力の増大に重大支障を来す事多言を要しません。

茲に奉天市が官民協力して他都市に率先し失明の防止と盲人の福祉増進に寄与せんとする事の徒爾ならざるを確信致します。幸ひに貴下の御賛同を得て本計画の実現を見る事が出来ますならば私共の欣快之に過ぐるものではありません。

何卒応分のご支援を切望いたします。 康徳八年三月八日

第一部は論説として、満洲医科大学医院長で奉天盲人福祉協会理事でもある船石晋一が「満洲に於ける失明者の状態」という論文を書いている。この船石論文に続き大村は、「世界に於ける盲人福祉事業」という論文を執筆している。その中で「この優れたる特性感覚を充分に動員して国家に貢献せしむる所に盲教育や福祉事業の目標がおかれなくてはならない」と論じ、「盲人と職業」にふれて次のように論じているのは注目すべきことである。

出来得る限り広い範囲に盲人の徳性感覚を活用し得る生産的な仕事を与へて彼等をして小にしては一家、大にしては国家社会に貢献し得るとの自信を持たしむると共にその生活を自らの手によつて保証せしむる事が望ましい。それには欧米に於ける様に授産所や、製造所を設けて、織物、編物、バスケット編み、製本、製靴、等に従事せしめるとか農場を開いて蔬菜、果樹、花卉等の栽培、豕、山羊、雉、兎等の小家畜の飼育、農畜産加工等をやらせるとか言つた集团的職業対策を主とし、特に優秀な者は進んで常人に伍し、職場に入らせるとか高等の学校に学ばせて智的職業に従事させるのである。

さらに、「人生の汚点とも見られ勝ちな盲人が国家有用の人的資源として明朗な生活を営む事となれば、それは単に彼等自身の幸福となるばかりで無く、一般人を鼓舞激励し、社会全体を明

朗にするであらう」と論じ、また職業対策のみが、盲人の対策ではなく、教育や対策に向けての根本的なことを付随して行う必要性を説くのである。したがってこの福祉協会を基点にして種々の事業や団体が設立されていくことになる。

## (二) 奉天盲人福祉協会の設立と展開

既述したように奉天盲人福祉協会は一九四一年三月に設立され、市公署三階正庁において設立の式典が挙行され、会長には鄭奉天市長が、副会長に多田晃副市長が就任した。そして常務理事に龐行政所長が就き、大村はその主事、そして啓明学園園長として任命されている。協会の当面の最重要事業として啓明学園の設営があり、後述するようにそれは一月一日に開校されるに至る。また翌年一〇月には一般盲人の自治的組織「盲人団」が結成されている。そして協会は「護眼運動」や「眼の保護週間」等の事業を展開していった。これらについては次章で論じることにする。

さて、この協会の結成された年、すなわち一九四一年二月八日、日本はハワイ真珠湾を攻撃し、米英に対して宣戦布告をシアジア太平洋戦争に突入していく。こうした戦争によって生じる相当な困難の中で、三年を経て『創業三年之回顧』という著作を上梓するが、この事業について次のように論じている。

今や大陸の盲人も永世の眠りから醒めて王道の光に浴し、大東亜共栄の栄光に与らんとしてゐるのであります。近くは国都新京にも盲人福祉協会の誕生を見んとし、漸次国内各区域の愛盲の聖火が点ぜられること、思われます。かくして全国数十万の盲人に国家の恩沢が及び

ますならばそれは盲人にとつての幸福に留らず、今まで盲人を家族の中に持つて絶えざる苦惱と肩身のせまさとを味つてゐた数百万の親が、子が、妻が、夫が後顧の憂ひ無くして、或ひは米英撲滅の第一線に、或ひは銃後の生産増強に勇躍邁進することが出来るでありませう。また本事業に依つて失明の重大性が国民一般に認識せられ、国民拳つて貴重な両眼を愛護しつ、日々の職場に敢闘しますならば国力の増大と聖戦の完遂は一層容易になるでありませう。<sup>(4)</sup>

そして大村は「本協会創業の三年は謂はゞ満洲盲人福祉事業の試作時代でありました。世界の各国はそれぐ巨費を投じて事業の完璧を期し各国各々国情に応じて事業に特徴を持つてゐるのでありますが我が満洲国の如き民族協和の王道国家に於てはおのずから他国に類を見ざる新機軸を生み出すべきであります。この意味に於て本協会過去三年の経験は誠に貴重なものであります。私共はこの経験を充分に生かし、将来世界文化の最高峰をゆく我が満洲国にふさわしい盲人福祉事業の確立に資したいと思ひます」と抱負を語つて<sup>(45)</sup>いる。満洲国という傀儡の国家という幻想はみられず、大村にはただ懐かしい「第二の故郷」という認識があるのみである。ここには日本の中国本土への侵略という視点はなく、満洲は日本の延長上にあり、極楽王土の「満洲国」建<sup>(46)</sup>国という認識が強く発露されている。こうした満洲への認識は当時の多くの日本人のもつていたものであるうし、大村は政治的課題よりもそこに暮らす人々の生活、そして彼等の福祉の課題に果敢に挑戦しているという思念が窺がわれる。

## 第七章 満洲時代（二）―奉天での諸事業―

## （一）奉天省盲人調査

既述したように大村は一九四四年に『創業三年之回顧』という著を満州盲人協会から上梓するが、この著は協会創立後三年の事業報告とともにその成果の発表であった。ここでこの内容について少し論じておくことにしよう。それを盲人調査、啓明学園、老人団、そしてその他の事業の四つについてふれておきたい。

第一の「盲人調査」であるが、この協会が取り組むべき調査は、「市内盲人の実態調査」、「盲児の教育施設の設営」、「市内外に於ける失明防止運動」であった。奉天盲人福祉協会がさしあたり重要な事業としているのが盲人の実態調査であった。これについてみておきたい。社会事業が国家の要請に依っていくためには、「事業対象となるべき人員の社会に於ける実態を調査し、精密なる記録、統計等によつて来る原因を究明」していくことが第一に必要な不可欠であり、それに基づき原因の解決、そして組織的方法でもって積極的に指導錬成が必要であると、すなわち第一盲人調査、第二失明防止、第三に教育と述べている。<sup>46</sup>そしてトラコーマ疾患について詳述し、次に統計表として「盲人統計表」「失明原因統計表」「失明年齢及現在年齢統計表」「職業別統計表」が掲載されている。その中で奉天市の数字はないが、「奉天省下盲人数統計表」<sup>47</sup>を掲げておく。

奉天省下盲人數統計表

備 老	種 別	地 名			
		全 盲	準 盲	半 盲	
全盲ハ明暗ヲ辨ゼザルモノ 準盲ハ一米ノ距離ニ於テ指ノ數ヲ辨別シ得ザルモノ 半盲ハ一米乃至三米ノ距離ニ於テ指ノ數ヲ辨別シ得ザルモノ		奉天市 (未了)			
		撫順市	46	8	2
		遼陽市	99	3	4
		鞍山市	47	2	2
		營口市	66	1	5
		本溪湖 (未解答)			
		鐵嶺縣	38	2	11
		瀋陽縣	193	16	9
		鐵嶺縣	157	8	17
		撫順縣	56	8	1
		清原縣	41	14	3
		營口 (未解答)			
		康平縣	83	10	4
		遼中縣	174	7	4
		復縣	145	11	7
		遼陽縣	322	5	4
		新民縣	625	53	19
		海城縣	240	19	8
		法庫縣	112	11	16
		本溪湖縣	58	9	3
		興京縣	55	6	2
	蓋平縣	119	3	1	
	合 計	2676	196	122	
	總 計			2994	

## (二) 啓明学園をめぐって

大村が当初から奉天で展開する重要な施設の一つは啓明学園の経営であった。当時、当地には盲人の施設として英国の宣教師が経営する「重明瞽目院」という施設があったが、これは女子盲児の施設で男子のものが必要であった。そこで一九四一年一月に開園式を挙行し、大村はその園長となった。奉天盲人福祉協会の最重要事業の一つとして位置づけられた啓明学園は奉天城内大南門裡の前学舎において、鄭禹奉天市長らの出席の下、開校式を挙げた。『愛盲之烽火』によれば、この著の刊行が一〇月であるので、まだ学校開校の準備段階しか記されていない。しかし『創業三年之回顧』を紐解けば、三年間の実績が分かる。市長は祝辞で次のように述べている。

……前略……見らる、通り啓明学園の発足は甚だ小規模であります。然し乍ら大樹と云へども先づ小さき種子が蒔かれなくてはなりません。良き樹木を得るためには良き種子を蒔かなくてはなりません。この意味に於きまして啓明学園が最も選ばれたる良き種子としてこの地に蒔かれましたことは最も大いなる喜びであります。願くはこの小さき種子が天の恵みと在奉天官民諸氏の御協力に依りまして人生最大の不幸を換へて人間が其の苦難を如何に突破し得るかと云ふ尊い証明を立て得る、聖なる道場たらしむると共にこれにより多くの目の見える一般学生児童を鼓舞激励し、延いては国家の仁徳を中外に宣揚し以つて王道楽土の実現に寄与せんと欲する次第であります。<sup>(48)</sup>

開校当時は五名であったが、その後増加し三年後には二七名となっている。<sup>(49)</sup> 満洲最初の盲学校として開校されたが、男子のみであった。全人的国民教育の方針で生徒はすべて寄宿舎で生活し、「家庭的雰囲気のうち」に規律的錬成を施して明朗快潤な少年に教育するとしている。第二に教

材は国民学校のそれに準拠し、点字は日文と満文を教えているが、日文の進歩が著しいとしている。第三に情操教育としてハーモニカの合奏を教えている。第四に作業科において木工や毛糸編み、学校農園においての蔬菜花卉の栽培、小動物の飼育、また上級になれば按摩術も教授している。全寮制であったので、大村とともに妻きみの援助も大きかった。後年きみは「言語、習慣のちがう異国で、自分の子供のほかに三十名近い、目は見えないが非常に元気で優秀な男の子達の世話を一手に引受けた私は未熟な信仰ではありましたが、ただひたむきに主につかえる思いで盲児たちの身のまわりの世話に、使用人と共に立ち働いたものでした。一つ家に住み、一つ釜のごはんを食べてすごした盲児たちと、私共との間柄は、ほんとうの親子と少しも変わらず、彼らは私たちを「お父さん」「お母さん」と呼んで親しんでくれました」と回顧している。

### (三) 盲人団について

日本では大日本盲人会が結成されていたが、満洲においても一九四二年一〇月三〇日、奉天盲人福祉協会の傘下のもとに、「盲人団」という組織が創設されることになる。その「結成趣意書」<sup>(32)</sup>は以下のとおりである。

大東亜戦争の勃発とその戦果とは過去に於いて全く米英の植民地化せんとしたる東亜の天地に東亜諸民族が相寄り相助けて共存共栄の新秩序を建設せんとするに至らしめたり。この時に当り我が満洲国は建国十周年を慶祝すると共に親邦日本に協力して新東亜の建設に絶大な貢献をなしつつあり。国民は挙げてこの回天の偉業に参画せんが為めに孜々營々として生業にいそしみつつあり。実に国家が個人に期待する所今日の如く大なるは無し。我等盲人は

不幸にして有用なる五官の一を失したりと雖も尚ほ残余の感覚を以つてこれを補ひ、健全なる頭脳と肉体とを以つて、日々国恩の下に生を楽しむつゝあり、何ぞ我等又国民の一員として起つて滅私奉公の実を挙げ得ざる。こゝに於いてか我等は奉天盲人福祉協会の麾下に馳せ参じ、盲人団を結成して自治共同以つて相互の福祉を図ると共に微力を結集していさゝかなりとも国家に奉仕せんとする所以なり。……以下略……

そして以下のような事項を申し合わせている。<sup>(3)</sup>

一、吾等は奉天省下各県地区盲人団結成の機運を促進して之を全国に及し可及的速かに満洲帝国盲人会（仮称）の結成を期す。

一、吾等は満洲盲人の名に於て本年度中に軍用飛行機の献納を期す。

一、吾等は盲人団運動を協和会運動に合流することを期す。

一、吾等は按摩、卜易及音楽の特殊技能を以つて軍及職場に対し慰問奉仕の実践を期す。

一、吾等は防空監視員、工員等聴覚及触覚を活用し得る勤務に採用されんことを期す。

一、吾等は満洲帝国盲人福祉協会の早期実現を期す。

このように盲人団の結成は組合費を徴収し、団員同志の福祉向上を目指すものであり、例えば貧困家庭の盲児を啓明学園に入学させる救済費に充当する相互扶助的な役割をもつものであった。そして同時に、この団体は戦争への積極的な協力を明確に謳っていることも看過すべきではない。

#### (四) その他の事業、傷痍軍人の保護

(i) 岩橋武夫の招聘

一九四三年、盲人福祉協会の理事会は盲人文化講演会と盲人福祉思想の普及目的の為に岩橋武夫と宮城道雄の満洲への招聘を決定した。そのために大村は同年三月、久しぶりに招聘の為に妻と二人で大阪に行っている。岩橋は教え子との誼でもあったか、招聘に賛同したが、宮城は実現できなかった。そして同年秋に岩橋武夫を満洲の地に迎え、講演会を開催し視覚障害者の福祉の向上のための運動が実現した。岩橋の講演は奉天、新京、ハルビン、錦州、安東で持たれ、その会は盛況であった。

#### (..ii) 眼の保護週間

国民の眼に対する衛生思想を普及させていく必要もあつた。日本国内においてはその一環として失明防止運動は中央盲人福祉協会の主唱によって、九月一八日を「眼の記念日」として全国的に展開されていた。奉天においても一九四一年から九月一八日を中心とする一週間を保護週間として開始されていた。一回目は都市を中心に実施されたが、二年目は市の外郭地区や平生医療に恵まれないところで実施され大きな成果を上げた。四三年の第三回目は政府の計画「厚生週間運動」に連動し、市の防疫科と共にトラコーマ、結核及び花柳病に対する撲滅運動を展開している。こうした運動、あるいは事業は失明の原因疾患と深く結びついており、効果があつたと報じている。

#### (..iii) 盲人文化展覧会

これは一般の人たちへの盲人文化の啓発のため、その実情を知らせていく事業である。一九四二（康德九）年が満洲建国一〇周年にあたり、それを機に協会も盲人文化博覧会を開催した。出品物は盲教育に関する資料、盲人用器具機材、盲人製作品、盲人文化に関する資料、盲人職業に関する資料、失明軍人に関する資料、失明防止に関する資料、其他盲人福祉に関する資料

となっている。

(iv) 失明軍人の事業

大村は敗戦の色がかなり濃くなった一九四五年五月、奉天陸軍病院庶務課長陸軍軍医中佐の訪問を受けることになる。それは中国戦線で眼を負傷した兵が増加し、その再教育と生活訓練の依頼であった。『三死一生』の回顧によれば、この中佐の懇願に心を動かされて週二回ずつ、陸軍に出向し数十名の失明兵に、失明者としての世に処する心がげや点字を教授したことが記されている。その後さらに失明兵の増加に伴い奉天市の郊外の満鉄の休憩所を接収し、そこに「奉天失明軍人教育所」を設け六〇余名を移した。管理者は田中陸軍中尉で、大村は教官に任じられている。かくて七月からここに宿泊し指導にあたったとある。しかし、「その間不衛生な城内の生活の中で、家では二人の女兒を失<sup>(54)</sup>うという不幸もあったのである。

このように、満洲での盲人を対象にした事業は戦争の影を落としながらも、軌道に乗りつつあったが、一方、戦争は日ごとに激しさを増し、その終末は決定的となっていく。一九四五年八月一日のソ連の参戦は、敗色が濃い中でそれに追い打ちをかけ、敗戦を決定づけるものとなった。一日、大村一家は身重の妻とともに温泉地五竜背に疎開を余儀なくされ、翌日天皇の放送「詔勅」を聴くことになる。五竜背には共産党八路军が駐留し、一応生活は安定した。九月四日に無事、女兒を出産し、めぐみと命名された。そして翌九月に引き上げが実現することになる。つまり敗戦からこの五竜背において約一年間生活したのである。気になる啓明学園は戦後、奉天市に移管されスコットランド宣教会経営の「重明女盲院」と合併し、「瀋陽市盲校」として継続している。<sup>(55)</sup>

## 第八章 戦後—シロアム教会の創設

### (一) シロアム教会の設立

さて大村は戦後、一九四六年一〇月に引き上げ船にて凡そ六年ぶりに故国の土を踏んだ。恐らく彼が感じた心の景色は焼け野原から懸命に生きている日本人の姿であつたろう。廢墟の中で如何に行くべきかを大村は新しい生き方をこの日本で考えていかなければならなかつた。当初大村一家が身を寄せたのは兄の阿佐ヶ谷の牧師館であつた。そして大村は家族や旧友の好本督らとの再会をとおして、今自分がやらなければならないことは原点に戻り、キリスト者として誠実に生きるということであつた。かくて大村は神学専門学校（現東京神学大学）の聴講生になり、神学の研究をしていくことになるのである。そして神学を修めたあと補教師の試験に合格し、日本キリスト教団の補教師に就いた。また恩師岩橋の紹介もあり、当時盲人キリスト教信仰会、東京盲人会館（現ヘレン・ケラー協会）とも関係を持ち、盲人たちへの伝道活動を中心に据えるようになった。また会館内で、中途失明者に対して英語や点字を教授していったが、ここで聖書研究会を主宰していくことになる。これがシロアム教会の原点ともなつた。そして阿佐ヶ谷から高田馬場のほど近いところに家（「真珠の家」）を取得した。

このような経緯のもと、一九四八（昭和二三）年に、シロアム伝道所を開設することになる。「かくして一九四八年六月十日主の日に、盲人会館二階の講堂において、シロアム伝道所の創立礼拝が、盲人求道者を中心に、なり立ての伝道師、私の司式によってとり行われた。説教者には兄勇教師が迎えられた。教区主事佐藤春吉牧師が、教区山谷省吾先生の祝辞を代読された」とある。<sup>56)</sup>

日曜礼拝はこの盲人会館で、祈祷会は近くの「真珠の家」で守り続けられていくことになる。また新しく礼拝堂も新築されて、五〇年のクリスマスは新礼拝堂で執り行われた。そして牧師館も新築されている。さらに五二年にはシロアム幼稚園を設立し、その園長ともなった。「善永が牧師として、この三十年間教会に仕えた中で、最も教勢が上り、教会内に活気が満ちあふれていたのは一九六〇〜六八年のころで、元気のよい若者たちが多く出入りしていました<sup>(57)</sup>」とある。その後は多くの宣教師や支援の学生、ボランティアらによってシロアム教会は支えられていった。

## (二)「日本盲人会連合」と「日本盲人キリスト教伝道協議会」

ここで戦後の視覚障害者福祉に眼を転じてみると、「盲人の文化的、経済的向上と社会的地位の躍進を図り、進んで平和日本建設のため、真に人道的使命に立脚し、社会公共のために寄与せん<sup>(58)</sup>」とする理想を掲げ一九四八年八月一七日と翌日、大阪府下貝塚市において全国から七〇人の参加を得て「日本盲人会連合」（日盲連）が組織され、結成大会が催された。そして会長には岩橋武夫が就任し、大村は理事として「渉外部長」の役割を担っている<sup>(59)</sup>。またこの年の大きなイベントとして、八月末にヘレン・ケラーの二度目の来日があった。日盲連の結成はこのヘレン・ケラーの来日を意識して結成された如く、来日歓迎の宣言と決議がなされた。宣言には「時は来た。新時代の太陽は昇らんとしている。今回、はるばる来朝せんとするヘレン・ケラー女史の、献身的愛盲の赤誠に応へ、ここに拳国的な盲界の一大統合を期した我等は、敗戦の混沌と彷徨より起ち上り、盲人の文化的、経済的向上と、社会的地位の躍進を図り、進んで平和日本建設のため、真に人道的使命に立脚し、社会公共のために寄与せんことを誓う<sup>(60)</sup>」というものであった。

こうした戦後の視覚障害者たちの運動にも大村は参加している。このヘレン・ケラーの来日を契機にして、翌年、身体障害者福祉法が日の目をみることになるのである。

大村の戦後の福祉活動を語るとき、もう一つの運動を記しておかなければならない。それは「日本盲人キリスト教伝道協議会」のことである。この協議会の前身として、戦前から「盲人基督教信仰会」という存在があった。戦後、既述のヘレン・ケラー来日に際し、ジョン・ミルトン協会総主事のストファー夫妻も来日し、ストファーは「盲聾啞の福祉」について各地を講演した。これが契機となつて一九五〇年八月、日本キリスト教団と盲人側の双方が出席し、日本盲人キリスト教伝道協議会の発起人会が開かれることとなつた。日本キリスト教団からは、友井禎（総主事）、柏井光蔵（伝道部長）、高橋良（主事）が出席し、盲人側からは好本督、中村京太郎、熊谷鉄太郎、喜久田倫章、今村幾太らと共に大村も出席している。<sup>(61)</sup>そして翌五一年七月、箱根において日本盲人キリスト教伝道協議会の創立総会が持たれ、ここに全国的な組織となり、盲人伝道はさらなる展開をみせていくことになる。この総会で盲人側から選出された代表者は一四名で、この内、熊谷鉄太郎、岩橋武夫、本間一夫、大村善永、瀬尾真澄の五名が関学の出身者であつた。<sup>(62)</sup>またその委員長には好本督が副委員長に柏井光蔵が就き、今駒泰成が事務局の活動を遂行していった。ちなみにその後、好本が英国に帰国した後は柏井が一九七四（昭和四九）年一二月までその職に就いている。大村も中央委員として春秋の巡回伝道において、盲学校や教会での伝道集会に出かけ東奔西走の日々を送ることになる。<sup>(63)</sup>

しかし大村も病と歳には勝てなかつた。一九七八年四月二日、湯河原の万葉荘で行われていた関東地区盲信徒修養会での説教の席上で倒れた。その後診断の結果脳腫瘍が原因であつたが、八

月に手術をし快復する。人生三回目の「死」との闘いでもあった。その後八一年には隠退し名譽牧師となった。そして大村は八九年二月二日、八五歳でもって天に召されていったのである。シロアム教会は大村の没後も二〇〇八年六月に「創立六〇周年記念礼拝」を執り行い、現在に至っている。

## おわりに

以上大急ぎで大村善永の生涯とその事業について論じてきた。比較的裕福な家に誕生しながらも、幼い時に満洲に住む叔父の家に養子にやられ、異国の地で少年時代を過ごし、中学を卒業し、岡山の六校に入学し夢多き学窓生活を送ろうとしていた矢先、眼を患い退学を余儀なくされた。失意の中で今度は朝鮮にて農業に励むも、今度はマラリヤがもとで完全に光を失い仕事を断念せざるを得なかった。そうした中、大村は聖書と共に点字を取得し新しく生きていくことを決心していく。ヘレン・ケラーや岩橋武夫の生き方が彼の羅針盤でもあった。そして彼は意を決して大阪に出て、関西学院に学ぶことになる。英文学を専攻し四年間勉学に励み、卒業後は横浜訓盲院で教育職として働く。日本が世界大恐慌、昭和恐慌、満洲事変、五・一五事件、二・二六事件、日中戦争等々、一五年戦争という激動期の青春時代であった。

横浜訓盲院も一九四〇年に辞めて、再度満洲の土を踏むことになる。彼が気になったのは日本でなく満洲に住む視覚に障害のある人々のことであつた。もちろん彼には日本政府の満洲政策について、どれほど見えていたかはわからないが、そこに暮らす人々のことが政治を超えて気にか

かることであつた。奉天（瀋陽）での時代は太平洋戦争と軌を一にしている。彼はここで奉天盲人福祉協会での事業、そして啓明学園という視覚障害の子供たちの学校を創設し、その事業に打ち込んでいった。しかし日本は敗戦を迎えて、帰国することになる。

帰国後は日本盲人会連合や日本盲人キリスト教伝道協議会の設立に関与し、信仰と福祉事業に関わりながら、一方でキリスト教の伝道者として、東京にシロアム教会を設立し、あるいは盲人伝道に粉骨砕身し牧会活動を中心に生きていった。大村は晩年に自叙伝『三死一生』の執筆に多くの労力を費やした。大村はその末尾を「三回の死に直面しながら、不思議にも守られ、助けられて今生かされていること自体、主が私になし給うた愛の奇跡である。唯聖名を崇め、主を讚美したい」という言葉で結んでいる。

この小論は「はじめに」でも断つたように、大村の生涯とその事績について概略を記したに過ぎない。大村についての史料をまだ渉獵したわけではない。またライトハウスの点字雑誌『黎明』にも執筆しており、そうした史料を利用していない。大村研究の深化は今後の課題とし、所期の目的を達した今、一先ず擱筆することとする。

#### 【注】

(1) 代表的なものを挙げておくと、熊谷鉄太郎については、玉田敬次『熊谷鉄太郎』（日本盲人福祉研究会、一九八五）がまとまった伝記としてある。岩橋武夫については、関宏之『岩橋武夫』（日本盲人福祉研究会、一九八三）、拙論「岩橋武夫研究覚書―その歩みと業績を中心に」（関西学院大学人権研究）（第二三号）等がある。また『日本ライトハウス四十年史』（日本ライトハウス、

- 一九七二）や日本ライトハウス21世紀研究会編『わが国の障害者福祉とヘレン・ケラー』（教育出版、二〇〇二）も岩橋の業績全般にふれている。
- (2) 本間一夫については池田澄子『愛の点字図書館長…全盲をのりこえて日本点字図書館を作った本間一夫』（偕成社、一九九四）、古澤敏雄『本間一夫この人、その時代』（善本社、一九九七）等がある。また高尾正徳に関しては彼の業績を讀えて『追悼文集 光をもとめて』（島根ライトハウス、一九九〇）が刊行されている。関学の出身者について簡単に触れた拙稿「関西学院における福祉の系譜―戦前を中心にした素描―」（社会福祉学の展望）（相川出版、二〇一一）も参考されたい。
- (3) この論文は『視覚障害』第二八一号（二〇一一）に掲載されている。ほかに彼の生涯を簡単にふれたものとして阿佐博「大村善永」『道ひとすじ 昭和を生きた盲人たち』（あづさ書店、一九九三）一三五―一四〇頁、がある。また最近、関西学院大学出版会から英文で出版されたChizuru Saekiの著 *SIGHTLESS AMBASSADORS* は大村の満洲での事業について触れている。著のサブタイトルには「Iwahashi Takeo and His Follower's Cultural Diplomacy through Social Welfare for the Blind in Asia, 1937 - 1957」であり、福祉史というより政治文化史的な分析が興味深い。
- (4) この大村の自伝『三死一生』（ぎょうせい、一九八八）は、彼の妻きみの語るところによれば、ある日、大村が書き溜めた点字の原稿を前にして次の様に語ったという。「これを墨字に直したいのだが、書いてくれないか。自分は中途失明者として人並ではない言わば苦難の道を行んで来た。苦難の道とは言え、いつも主が先に立ち給うて手をとって共に歩んでくださった。そのことの証しをさせて頂きたい事と、誠に至らぬ者であったが、自分がこの世に生きていたというしるしを残したくて、数年前から少しずつ書き溜めてきたものである。点字ではどうにもならないから墨字に書き直してくれないか」（二三八頁）と。こうした彼の想いが込められたもので、

かつ夫婦の証しともいえる自伝でもある。もちろん自伝であるが故に、思い違いや当時の回顧が合理化されている点がないとは言えないが、出来るだけ客観的に見ていく必要があることはいうまでもない。

(5) 「満洲」は周知のとおり、地域としては現在の中国東北部に位置する所であるが、ここではその言葉の意味を考慮し「満州」でなく「満洲」と表示しておく。また地名についてであるが奉天(現瀋陽市)等をそのまま使用する。満洲関係のものは今、多く出版されているが、さしあたり満洲の歴史については小林英夫『満洲の歴史』(講談社、二〇〇八)等を主に参照した。

(6) 『日本キリスト教歴史大事典』(教文館、一九九三)の「山梨県」(一四四二頁)の項を参照。

(7) 『三死一生』一五頁。

(8) 同右、一六頁。

(9) 同右、同頁。

(10) 同右、一九―二〇頁。

(11) 同右、二四頁。

(12) 同右、三四頁。

(13) 同右、三六頁。

(14) 同右、四〇頁。

(15) 『関西学院新聞』第四〇号(一九二九年五月二〇日)。

(16) 『三死一生』四四頁。

(17) 同右、四四頁。

(18) 『関西学院新聞』大学昇格祝賀号(一九三二年二月二〇日)。

(19) 『三死一生』、四九頁。

(20) この大村の卒業論文は関西学院史編纂室に保存されていた。表紙には「A Study on Keats's

Odes as 'The Graduation Thesis by Y. Omura 1933』とタイプで記されており、本文はどこどこに修正が入っている。

- (21) 『関西学院新聞』第八六号（一九三三年三月二〇日）には第四三回卒業式の模様が報じられている。ベーツ院長は卒業生に「卒業後も関西学院の数年の生活に於て体得せられた自由とキリスト教的愛の精神を根底に大いに社会に活躍せられるやうと卒業生を鼓舞する辞を述べられた」と報じられている。また卒業生名簿があり、大村は英文学科三〇名の中で秋田正男、生島泰蔵とともに名前の上に「優秀」という二文字が付されている。

- (22) 横浜訓盲院については横浜訓盲院『光を求めて九十年』（横浜訓盲院、一九七九）を主に参照した。横浜訓盲院は一八八九年（明治二二）年九月二六日、アメリカ人ミセスC・P・ドレーバーによってキリスト教主義の盲人保護施設・機関として「盲人福音会」という名称で創設され、一九〇〇年に神奈川県より私立学校として認可され「横浜基督教訓盲院」と改称された。一九二四年文部省より私立盲学校として許可され「横浜訓盲院」と改称された。

- (23) 『光を求めて九十年』一六三頁。

- (24) 同右、一六三～一六四頁。

- (25) 『三死一生』五六頁。

- (26) ヘレン・ケラーの日本の講演や満洲への行程については、岩橋英行『青い鳥のうた』（日本放送出版協会、一九八〇）に詳しい。ヘレン・ケラーが下関から釜山へと向かったのは七月一日で、既に日中戦争は勃発し、奉天、大連には行ったが、南京、北京には行けず、日本に引き返すことになる（同書、八七頁）。

- (27) 例えば、『三死一生』において「訓盲院では昼やすみになると男子職員が土手の芝生にあぐらをかいて、盛んに戦争批判をたたかわせた。残念なことに大多数が好戦論、私たちは二、三人だけが非戦論であった」（五六頁）、あるいは「その中で戦争反対を主張していた私の立場はいつも

孤独であった」(五七頁)とある。

(28) 『三死一生』五七頁。

(29) 手塚竜磨「日本における平和運動推進の先駆者ギルバート・ボールズ」『英学史の周辺』(吾妻書房、一九六八)によれば、ギルバート・ボールズ(Bowles, Gilbert 1869-1960)は米国アイオワ州で生まれ、フィラデルフィア友会の宣教師として、一九〇一年に夫妻で来日。普連土女学校の理事長として、また日語文化学校の創設、日本キリスト教友会の組織化に尽力したが、「平和運動の推進者」(二〇五頁)として知られている。しかしボールズは「無二の親友であった新渡戸稲造とともにクエーカー主義にもとづく絶対平和運動に挺身し『太平洋のかけはし』となって平和の維持につとめたけれども、ついに日米間の開戦となり帰国を余儀なくされた」(二〇七頁)。大村がここで彼の平和思想の影響を受けたことも推察されるが、満洲で直接的には平和運動をしていない。しかしボールズも期待したように、満洲での盲人に対する活動そのものが、平和と関係するという認識ではなかったか。

(30) 大村勇編『満洲の盲人に光を』(一九四〇)二五頁。

(31) 同右、二〇三頁。

(32) 同右、三頁。

(33) 「満洲盲人保護並びに教育に関する建白書」『満洲の盲人に光を』五〇―一一頁。

(34) 大村が提出した建白書に対する回答に「しかるところ満洲国は建国以来日尚浅く、諸種の対策になし得ないことを痛感しており、貴方において地方的事業の開発に尽力されんことを期待するものである」といった主旨が記されており、「対満事務局を通じ、以上のような回答を受け取った私は、満洲国内最大の人口を持つ奉天市での『地方的開発』に大きな希望をつなぐことが出来た」(『三死一生』五八頁)と記している。たしかに、満洲の社会事業、とりわけこうした視

覚障害者の課題については、重要な保健衛生と関連を持ちながら展開されていく必要があるが、それへの対策は緒についたばかりであった。ちなみに満洲での社会事業の歴史については沈潔『満洲国「社会事業史」』（ミネルヴァ書房、一九九六）がある。

- (35) 『満洲の盲人に光を』（一九四〇）は大村勇が編集をしているが、「あとがき」において、「昨夏、私は実弟大村善永から、満洲に於ける盲人教育事業に献身せんとすの決意を聞いた時、不自由な身を以つて、而も家族を抱へて、かかる途に進む事を肉親の一人として頗る危んだが、其の後の彼の熱意と、綿密なる思慮と、十字架の主に従ふ信仰の決意とを見、更らに今回の私自身の視察旅行によつて得た経験を通して、今や、弟の此の企に対して満腔の賛意と同情とを有するものである」と記している。ちなみに大村勇（一九〇一〜一九九二）は一九二八年、青山学院神学部卒業後、千葉教会の牧師、阿佐ヶ谷教会の牧師歴任、ボストン大学に留学、戦前から戦後にかけて日本キリスト教団の要職に就き、また青山学院神学部長、東京神学大理事長等をも歴任している。著書に『主を求めよそして生きよ…大村勇説教集』（キリスト新聞社、一九七四）、阿佐ヶ谷教会編『輝く明けの明星…大村勇説教集』（日本基督教団阿佐ヶ谷教会、一九九一）等がある。

- (36) 『満洲の盲人に光を』一六〜一七頁。

- (37) 同右、一八頁。

- (38) 同右、二二頁。

- (39) 『三死一生』六〇頁。失明当時帰郷した時、平野が山梨の日下部教会の牧師をしていたその時からの関係である。『満洲の盲人に光を』の中でも、平野は大村が満洲の調査に入った時に再会し、大村が「日本人に代つて罪滅ぼしをする気持です」と吐露したことを受け「之れは決して祖国を恥かしめる言ではない。それは、彼が大陸の幸薄き盲友を思ふ人類愛のほとぼしりであると共に、誠に祖国日本の民族運動に強き責任を感じずる眞の愛国者の止みがたき魂の告白である」（二四頁）

と述べている。

- (40) 『愛盲之烽火』（奉天盲人福祉協会、一九四一）序言。
- (41) 大村善永編『愛盲之烽火』。この著の「編輯後記」には「奉天盲人福祉協会は同主事大村善永氏の渡満に依つて活発な活動を開始した。と、同時にかねて本問題に絶大の関心を寄せて来られた鄭奉天市長の「熱」で拍車をかけられた。更に多田副市長（タダ）の力でこれに揺ぎない基礎工事がほどこされた。医大の船石博士の御協力と各委員の挨拶と祝辞は本協会が将来果すべき幾多の社会事業を暗示して余りあること、思ふ」云々と記され、最後に「若素製薬株式会社」がこの出版の費用を負担したことの感謝が述べられている。
- (42) 『愛盲之烽火』三～四頁。
- (43) 同右、一一～一八頁。
- (44) 大村善永編『創業三年之回顧』（奉天盲人福祉協会、一九四四）二～三頁。この著の表紙には「創立三週年記念号」となっていて、中の文章はすべて日本語と中国語が併記されている。
- (45) 同右、三頁。
- (46) 同右、七～八頁。
- (47) 同右、一一頁。
- (48) 大村きみは当時のことにつき「奉天にはすでに宣教師の手によって重明瞽目院と云う盲女子のための学校があったので、私共は男盲児だけを対象とする啓明学園を創立して、全寮制の学園の形に全力投球しました」とある『シロアム教会三十年の歩み』（シロアム教会、一九七九）一二頁。
- (49) 『創業三年之回顧』一九～二〇頁。
- (50) 大村は「啓明学園は寄宿舎兼校舎に元気のいい男の子ばかり三十名を抱えて割れんばかりの賑やかさだった」（『三死一生』七七頁）と回顧している。
- (51) 『シロアム教会三十年の歩み』一三頁。

- (52) 『創業三年之回顧』二七頁。
- (53) 同右、二九頁。
- (54) 『シロアム教会三十年の歩み』一頁。
- (55) 『三死一生』九八頁参照。
- (56) 同右、一〇六―一〇七頁。
- (57) 『シロアム教会三十年の歩み』二三頁。
- (58) 日本盲人会連合五十年史編集委員会編『日本盲人会連合五十年史』（日本盲人会連合、一九九八）四六頁。同著によれば大村もこの集會に参加している。
- (59) 同右、同頁。
- (60) 同右、四七頁。ちなみに「決議」は「一、我等は、日本盲人の福祉と文化の向上のため、平和の戦士たらんことを期する。一、我等は世界的標準に立つ盲人社会立法の制定を期する。一、我等は、旧職業の保全と、新職業の開拓育成に努める。一、我等は、今まさに展開しつつあるヘレン・ケラーキャンペーンに対し、全面的に協力する」（同書、四七頁）というものであった。
- (61) この間の経緯については石松量蔵『盲人とキリスト教の歩み』（日本盲人基督教伝道協議会、一九五九）四五―四七頁を参照した。
- (62) 同右、四八頁。
- (63) 当時のことについて、大村きみは「一九五一年（昭和二六年）から一九六六年にかけては、教会の仕事とあいまって盲人伝道に最も力が注がれました。一九五一年に日本盲人キリスト教伝道協議会が組織され、全国レベルで盲人への伝道が強力にすすめられることになりました。中央委員にえらばれた善永は、その仕事のひとつとして、全国にある盲学校と、その付近にある教会への巡回伝道を、他の盲人牧師と共に荷う使命を与えられました」（『シロアム教会三十年の歩み』一九頁）と回顧している。

補注 この論文において、視覚に障害のある人の用語として、当時一般的に使われていた「盲人」を使用している。また、史料中に不適切な言葉があるが、史料の価値を尊重し、そのまま引用した。

※付記

この小論を執筆するにあたって、阿佐ヶ谷教会の大村栄牧師、シロアム教会の加藤誠・豊子牧師にお世話になりました。また学院史編纂室の皆様には大村に関する史料閲覧において、とりわけ川崎啓一氏からは大村の卒業論文の存在を教えてくださいいただきました。記して感謝致します。なお、この小論は昨年一月九日の第三七回関西学院史研究会に於ける「関西学院と福祉の系譜―岩橋武夫とその周辺―」という発表から大村善永に焦点をあてて論究したものである。